中勘助 『の戦後の児童文学作品「雷の太鼓とチャルメラ」及び「ひばりの話」に関する考察

- 初出未詳作品「雷の太鼓とチャルメラ」初出誌情報含む -

A Study on Naka Kansuke's Works for Children Post Second World War: Kaminari no Taiko to Charumera and Hibari no Hanashi On Kaminari no Taiko to Charumera's First Appearance in Sannen no Gakusyu -

木内英

実

Hidemi Kiuchi

要旨:

めの問いや註を入れる、子ども向けの分かり易い表現、用字にするなどの工夫が見受けられた。両作品ともに中勘助改編による角川書店版 概観した上で、中勘助の児童文学観を探った。それは人間社会への批判という大人向け作品と同様のテーマを有しながらも、初出時に本文読解のた ルメラ」の初出誌が『三年の学習』(学習研究社)であると新たに判明した。両作品の初出時より角川書店版『中勘助全集』掲載までの本文異同を 全集』掲載時に代表作との意識があったことが判明した。 して執筆した「雷の太鼓とチャルメラ」(一九五四年)及び「ひばりの話」(一九四六年)について調査した結果、初出未詳であった「雷の太鼓とチャ 「銀の匙」をはじめ中勘助の作品が国語科教科書収録児童文学作品として扱われた経緯の中で、第二次世界大戦後に中勘助が子どもを読者対象と

キーワード:中勘助 児童文学 童話 初出 第二次世界大戦

一はじめに

(一) 研究の目的

と、文章表現が中学生にも理解できる分かり易いこと、等の理由に過儀礼ごとにその折の出来事が記された子ども歳時記風であるこについて、内容が子ども時代を描いていること、方法が子どもの通科教科書に採用されてきた歴史を有する。中勘助の代表作「銀の匙」中勘助(一八八五~一九六五)の文学作品は一九二八年から国語

二巻) 勘助を物心ともに支えた稲森道三郎が記すように子ども向けの物語 ることが筆者調査により判明したことに伴い、同作及び小学生向け 『三年の学習』 ある」(「後記 の執筆が挙げられる。 四年半に亘る静岡市での療養疎開生活の業績として、 より戦前より中学校教科書教材として用いられてきた。戦中戦後の との記載がある「雷の太鼓とチャルメラ」が小学生向け雑誌 〈八月号〉(学習研究社、 雷の太鼓とチャルメラ 本稿では、岩波書店版全集では「初出未詳で 一九五四年八月) お伽話」『中勘助全集』第 静岡時代の中 初出であ

学観の変遷、以上を挙げる。学観の変遷、以上を挙げる。学観の変遷、以上を挙げる。学観の変遷、以上を挙げる。

二) 先行研究

げられる。 児童文学として中勘助の作品に注目した先行文献は次のように挙

二巻〉河出書房、一九五三年六月①山室静「かいせつ」『少年少女小説篇2』〈日本児童文学全集第一

の中勘助作「すいれん」の初出を「一九四〇年(昭和十五年)に出助は独自の品格を持った童話を書いています」と紹介し、同書収録関係なく。また、ジャアナリズムのながれからも、はなれて、中勘中勘助の児童文学作家性を「大正期に開花した児童文学の領域に

とったもの」と明かした。 た、いわば日記文学のかたちをとった随筆集『逍遥』のなかから、

六年一二月 ③稲森道三郎「四 羽鳥の文学」『羽鳥の中勘助』〈私家版〉一九五

静岡時代に執筆された『鳥の物語』中の「童話めいた物語」である「鶴の話」「ひばりの話」「鶯の話」の解題が示された。「鶴の話」「ひばりの話」は『フレンド』という子供向けの雑誌に大石哲路と云う人の挿絵が附けられて掲載されたこと、「鶯とほととぎすの話」は『さいらずは『カレンド』という子と、「鶯とほととぎすの話」は「志賀直哉氏から直接お話があって」と、「鶯とほととぎすの話」は「志賀直哉氏から直接お話があって」と、「鶯とほととぎすの話」は「志賀直哉氏から直接お話があって」と、「鶯とほとどぎすの話」は「志賀直哉氏から直接お話があって」という。

月野上弥生子集』〈中学生文学全集一七〉新紀元社、一九五七年六町とり』問題・鑑賞」・「『しずかな流れ』問題・鑑賞」『中勘助・のほとり』問題・鑑賞」・「『島守』問題・鑑賞」・「『沼

という感想文を引用し「この時筆者の中氏は、人間のみにくさといは何かになやみ、考えるために、こんな生活をしてみたのだろう」にしている。「『銀の匙』鑑賞」では中学生読者の感想文を引用し、「しっかりした観察力とせんさいな描写」といった特質を説明している。「島守」でも同様に「きっと彼(筆者注「島守」中の主人公)いる。「島守」でも同様に「きっと彼(筆者注「島守」中の主人公)にしかいる。「島守」でも同様に「きっと彼(筆者注「島守」中の主人公)にしている。「島守」でも同様に「きっと彼(筆者注「島守」中の主人公)にしている。「島守」でも同様に「きっと彼(筆者注「島守」中の主人公)にある。「島守」である。

まされていたのである」と作品背景に言及した。

全集26〉ポプラ社、一九六〇年三月『鶴の話』」・「三、『妹の死』」〉『中勘助集』〈新日本少年少女文学『朝の話』」・「三、『妹の死』」〉『中勘助集』〈新日本少年少女文学

である小林及び豊島区立目白小学校高学年でも読解・鑑賞可能にある小林及び豊島区立目白小学校教諭である進藤が司会を務め、 である小林及び豊島区立目白小学校教諭である進藤が司会を務め、 学校五年生の国語科授業で『鶴の話』『妹の死』を二回読んだ後に 学校五年生の国語科授業で『鶴の話』『妹の死』を二回読んだ後に 学校五年生の国語科授業で『鶴の話』『妹の死』を二回読んだ後に 学校五年生の国語科授業で『鶴の話』『妹の死』を二回読んだ後に 学校五年生の国語科授業で『鶴の話』『妹の死』を二回読んだ後に 学校五年生の国語科授業で『鶴の話』『妹の死』が小学校高学年でも読解・鑑賞可能 な作品であることを示している。

⑥石井桃子「『新日本児童文学選』について」『新日本児童文学選』 「『すいれん』は、作品集『逍遥』のなかにある作品。詩人のほとどもたちを、遠く天空に運ぶ力をもっていることがわかる」と子ど
もへの読み聞かせの結果として、日記体随筆『逍遥』収録「童話」
を「すいれん」と名付けて本書に採用したことを示した。

刊号〉学燈社、二〇〇八年八月⑦和田忠彦・野崎歓「対談:子どもの奪還」『国文学』〈8月臨時増

大人の言葉でやっている」特異性を認め、中勘助自身を子ども同様作品中に「日本の近代批判、現代批判」を「子どもの視線に立って、和田忠彦と野崎歓の対談の中で中勘助の『銀の匙』を取り上げ、

「規格外の、特権的な存在」であると述べている。

⑧市川浩昭「中勘助の嫉妬観」『国文学』〈七八八号 嫉妬考〉学8

社、二〇〇九年七月

「ひばりの話」のテーマを解釈した。 「ひばりの話」のテーマを解釈した。 「ひばりの話」のテーマを解釈した。 「ひばりの話」の表筆動機と共に「子供の雑誌にのせ見一日)との「ひばりの話」の執筆動機と共に「子供の雑誌にのせりがいた。」 「ひばりの話」の教筆動機と共に「子供の雑誌にのせりがいた。」 「ひばりの話」の表達があったことを明確にした。「欲望が産むりででである」「提婆達多」とは異なり「嫉妬を受け入れひたすらり、との「との「ひばりの話」の教筆動機と共に「子供の雑誌にのせり、との「との「との「との「とって初めての「純然たる童話の発表」(昭和二一年七年出

文庫中学生向け〉ポプラ社、二〇一六年一月の西本鶏介「解説」中勘助『銀の匙』〈日本の名作ポプラポケット

「子どものために書かれたものではないのに、子どもの心が手にしての根拠だと言及した。の要因として挙げ、更に主人公の成長に伴文学としての「銀の匙」の要因として挙げ、更に主人公の成長に伴文学としての「銀の匙」の要因として挙げ、更に主人公の成長に伴立がとしての根拠だと言及した。

二 研究方法…文献研究

した結果をもとに児童文学全集掲載中勘助文学作品一覧作成文学」「少年少女」「子ども」「童話」を検索語として入れ検索一) 国立国会図書館 NDL-Search にキーワード「中勘助」「児童

学習研究社、一九五四年八月)、②『くひな笛』(宝文館、一九 沢本⑦『中勘助全集』〈第八巻〉(角川書店、一九六〇年一二月 の本文異同を確認する。
⑦⑦の本文異同は 五七年三月)静岡市所蔵中勘助関係資料中の中勘助書き入れ手 ⑦「雷の太鼓とチャルメラ」初出 ヤルメラ お伽話」岩波書店版『中勘助全集』〈第二巻〉 (『三年の学習』〈八月号〉 「後記 雷の太鼓と を

参考に、静岡市所蔵中勘助直筆原稿を確認し比較する

勘助全集』〈第三巻〉(角川書店、一九六一年二月)の本文異同 年七月)(予『鳥の物語』(山根書店、一九四九年五月)②『中 原稿並びに手沢本を参考に確認する。 版 を確認する。⑦⑦の本文異同は「後記 レンド社、一九四六年六月)、⑤『余生』(八雲書店、一九四七 ⑦「ひばりの話」 初出 『中勘助全集』〈第三巻〉を参考に、 (『フレンド』〈五月・六月合併号〉 静岡市所蔵中勘助直筆 ひばりの話」岩波書店 フ

研究結果

- 巻末表1の通り。
- 「雷の太鼓とチャルメラ」

初出について

題名から分かるように小学校三年生向けに書かれた作品であること に併せて初出時の題名は「雷のたいことチャルメラ」。巻末特別ふ 『三年の学習』〈八月号〉(学習研究社、一九五四年八月)。

①頁ごとの問いと註につい

- ⑦一一三頁「1. この親子のすんでいた町は、どんなところでしょ う。○にぎやかな町○村のような町」という問いと選択肢が記さ れている (図1)。
- ①一一四頁「2. この親子はどうしてくらしをたてて、 ころの村々」と柱が記されている(図2)。 しょう。」という問いと「鬼神=つよい神さま。 横道=まがったことをすること。きんごうきんざい=近いと 天帝 = いたの 天の神さ で
- ①一一八頁「4. 雷さまのおいていったたいこは、親子に、 砂一一七頁「3. 雷さまは、どうして、たいこをおいていくことに なったのでしょう。」という問いが記されている(図3)。 どんな
- について、あなたは、どんなきもちをもちましたか。」という問 しあわせをおくったでしょう。 5.このおはなしにでる、 が記されている(図4)。 子ども
- ⑦一二一頁「6. これとおなじようなおはなしをきいたことはあり れている ませんか。どんなおはなしでしたか。7.このおはなしの中で、 いちばんおもしろかったのはどこでしたか。」という問いが記さ (図 5)。
- ②頁ごとの文章中の註について
- ⑦一一五頁「親子が生きたここちもせず」「だれぞおらんか」「ええにいい」 におい」「くわせい」「あんしんせい」「けっしてせん」 (Lo) (Lo) (Lo)

掲載誌

- **沙一一八頁** ①一一六頁「ちそうになるぞ」「えらいちそうになった」 (たいへんごちそう) 「なっとる」「じゃが」「くうてしもうたが」(たべてしまったが)
- (三) 一九頁 「のうては」 「もとより」

建一二〇頁

ろく「おはなしのページ」一一二~一二一頁、渡辺三郎による挿絵

(巻末図1~5)付き)

- ③振り仮名…「一けん」・「十五、六」(一一二頁)、「一つ」(一一三 頁)以外の全て(90種)の漢字にはルビが振られている
- ④漢字… 『くひな笛』 手沢本以降の本文に比すると漢字種は90と少 ひな笛』以降の本文表記)は「ショク」と地名がカタカナ表記さ なく、「支那」(『くひな笛』以降の本文表記)は「シナ」、「蜀」(『く
- 2 『くひな笛』収録本文について

いることである。 れぞをらんか」)等、初出に比して旧字体と古い表記が使用されて ました」「ゆゑ」「ぢや」「ませう」「をる」(「だれぞおらんか」→「だ 本文中の異同の特徴は「いふやうな」「ゐなかじみた」「いつて」「ゐ 『くひな笛』収録の際の題名は「雷の太鼓とちやるめら お伽話

- ①漢字種は初出時に比して+61で15種
- ②それ以外の本文異同としては頁ごとの問いと註、文章中の註の削 じゃありませんか。」→「でも私どもは死んでしまひます。鬼神 をあけたが」、「でも、わたくしどもはしんでしまいます。鬼神に といつて」、「そろそろ戸をあけたが」→「こはごはそろそろと戸 ろっと」→「ごろつと」、「人たちは、そら、あの孝行な子をごら 方を高い山また山に囲まれ」、「チャルメラ」→「ちやるめら」、「ご 除が大きい。それ以外に「三方を高く山また山にかこまれ」→「三 水車にして、米つき場をこしらえたらというと、」→「倒れでも らも」→「ずゐぶん遠方からも」、「たおれでもすればあぶないし、 に横道なしつていつたぢやありませんか。」、「ずいぶんとおくか 横道なしって、いったじゃありませんか。横道なしっていった ん、といって。」→「人たちは『そら、あの孝行な子をごらん。』

- 場をこしらへたらといふと」、末尾に「昭和二九年」加筆 すれば家がつぶれてしまひます。子供は考へて水車にして米つき
- 3 八巻〉編集用中勘助直筆原稿(図6)本文について 『くひな笛』手沢本書き入れ及び角川書店版『中勘助全集』〈第

が多用されたことである。漢字種数は2に同じ。 話」。本文中の異同の特徴は 『中勘助全集』収録の際の題名は「雷の太鼓とチャルメラ 「國」「瀧」「賈」「聲」等漢字の旧字体

それ以外の本文異同としては

ずしんと三足ばかり」。 りこひゃらりこひゃー」→「ピーピー ヒャラリコヒャラリコ がなってきました」→「雷が鳴りだしました」、「ぴーぴー ひゃら ヒャー」、「雷はずしん、ずしんと二足ばかり」→「雷はずしん、 「ちゃるめら」→「チャルメラ」、「ごろつと」→「ゴロッと」、「雷

- (三)「ひばりの話」
- 1 初出について

頁は九~一九頁、大石哲路による挿絵 されていることから、 ばりの話」の後頁には横山隆一による「フクチャン」の漫画が掲載 『フレンド』の対象年齢は不明だが、表紙・裏表紙 『フレンド』〈五月・六月合併号〉(フレンド社、一九四六年六月)。 小学生を対象にしていると推測される。 (図8~10) 付き (図7) 及び「ひ

②漢字…「浄土」「極楽」「菩薩」「楼閣」「寶池」「天人舞楽 ①振り仮名…冒頭頁には「蒙古」「念珠」「大臣」「彼」「銀盤」「中 「慈悲」「誓願の功徳」「妙なる天樂」「歌舞の菩薩」「誓願が成就 将姫」「姫君」「尋常」「錦」に振り仮名が振られている 仏教用語と、 姫の性格や奥山追放の事情、

機織りの様子を示

す「尋常」「御殿」「機の音」「讒言」「無實の罪」「嘆息」「同情

「當惑」「非道」「骨折り」「蟷螂」等1%字が漢字で表される。

2 『余生』収録本文

前書き・作品内の詩の変更、他二ヶ所の本文異同有り。

ひとつづつ話をするその話が 念珠の玉のやうにつながつてゐるな 「これは鳥物語といつて

いろいろな鳥が蒙古の王様のまへで

の話』や『鳩の話』と同列のものになるはずのところ偶まこれをの かの一つです。」→「これは鳥の物語のなかの一つの話として『雁

である。」 せることになつた子供の雑誌にむくやうに特に書きかへられたもの

おとどの殿に

姫が織る 機の音

きり はたり ちやう」

「おとどの殿に

織るはまんだら 機の音きこゆ

極楽のすがた

きり はたり ちやう

けふはみほとけ きのふは菩薩

楼閣 宝池

天人舞楽

きり はたり ちやう

われもきかん

みな人もきけ

おとどの殿に

姫が織る機の音

きり はたり ちやう」

「全く思ひもよらぬことで、私ども」→「なんともはや私ども」

「ゆめ心地にただばうぜんと」→「ただ夢心地にただ茫然と」

『鳥の物語』収録本文について

用字の大きな変更として、全漢字の振り仮名が削除される。末尾 「昭和二〇、九、九」加筆。

きり はたり ちやう

機の音 きこゆ

「おとどの殿に

織るは まんだら 極楽のすがた

きり はたり ちやう

きのふは 菩薩

けふは みほとけ

きり はたり ちやう

寶池

天人舞楽

きり はたり ちやう

われもきかん

みな 人もきけ

きり はたり ちやう

4 『中勘助全集』〈第三巻〉編集用中勘助直筆原稿(図11)本文に

「鴛鴦」「讒言」「塒」「梭」に振り仮名が振られる。

二○、九、九」→「昭和二十年九月九日」。
「ようし」→「よーし」「ちよつと」→「糸」、「聲」→「声」、「昭和だ茫然と」→「なだ茫然と」、「絲」→「糸」、「摩」→「南」「「青」、「昭和だ茫然と」→「よーし」「ちよつと」→「ちよいと」、「まんだら」→「ようし」→「よーし」「ちよつと」→「ひばり」(誤植修正)、「とはいえ」→「けれども」、「ひばり」→「ひばり」(誤植修正)、

四 考察

ばりの話」が児童文学全集には収録されている。 (一) 表1より戦前から中学校国語科教科書に掲載されてきた自伝 の読書コースG』〈公文教育研究会、一九八八年〉となった「ひ 図書、一九五四年〉に掲載された「鶴の話」と学習読書教材『くも んの読書コースG』〈公文教育研究会、一九八八年〉となった「ひんの読書コースG』〈公文教育研究会、一九八八年〉となった「ひんの読書コースG』〈公文教育研究会、一九八八年〉となった「ひんの読書コースG』〈公文教育研究会、一九八八年〉となった「ひんの読書コースG」〈公文教育研究会、一九八八年〉となった「ひんの読書コースG」〈公文教育研究会、一九八八年〉となった「ひんの読書」が見事である。

貴重な資料であった。「鶴の話」「ひばりの話」について中勘助は「自収録)が掲載されており、作者による作品評価を知ることができるには作者中勘助による作品解説(角川版、岩波版『中勘助全集』未には作者中勘助による作品解説(角川版、岩波版『中勘助全集』未の話」「ひばりの話」「沼のほとり(抄)」「しずかな流れ(抄)」、作の話」「砂とりの話」「でいて中勘助は「自動のできるの話」である。「鶴の匙」をはじめ、随筆「妹の死」「飛鳥(詩)」「藁科(詩)」「鶴

がすきです」と自分好みの作品であると語っている。ぞくするものです。うまいまずいはさておいて、私は『鳥の物語』むきと子どもむきにわけることのできる童話風物語のうち、後者に分の専売のように思っている一群の鳥の物語の中のもので、おとな

(二) 「雷の太鼓とチャルメラ」

く完成度が高い ような渡辺三郎による挿絵もあり、挿絵入り物語としては分かり易 字や使用語句について当然の編集と考えられる。本文理解を助ける 為の「はじめの読みずらさ」を指摘していることから、中勘助の用 みがいて書いている」と称賛しているのに対して他の二名の児童は よる座談会において、二名の児童は中勘助の文章を「ことばをよく な表記等の用字が特徴的である。先行研究⑤の小学校五年生児童に 雷が用いる古語めいた言葉について)、漢字への振り仮名、 振り仮名や註の記載同様に、読解を確認するための問いや註 は教科書や教師向け指導書における「学習の手引き」や難解な語 象用字(学年別漢字配当)が起因していると考えられる。 お伽話」と変更があった理由として、初出の場合、小学校三年生対 鼓とちゃるめら 「当用漢字でない、むずかしい漢字」、「昔のことばづかい」 題名が初出「雷のたいことチャルメラ」、『余生』収録時 お伽話」、全集収録時「雷の太鼓とチャル 初出時に がある ひらが 「雷の太 バメラ

呼ぶために吹くチャルメラ)の交換を持ち掛け、雷鳴を怖がる母親らう代わりに商売道具(雷が天上で鳴らす太鼓と支那そば屋が客を引く孝行息子が、鬼神の言質をとって支那そばの代金を支払っても母親が調理した支那そば全てを食べられてしまった支那そば屋台をプロットは「鬼神に横道なし」と言う雷に、売り歩く為に貧しい

が明るい印象を与える。行息子の機転、作品末尾において天上でチャルメラが鳴るユーモアとし裕福になる到富譚・孝子譚となっている。鬼神の言質をとる孝を助けるばかりか、雷の太鼓を見世物、後には水車に変えて収入源

的に大人向けであるのに対して子ども向け作品としてのジャンルを店版全集収録時に「お伽話」と題したことは、他の収録作品が基本り、検討材料が不足するが、『余生』及び中勘助が編集した角川書作者中勘助による本作品の解説や先行研究は現時点で未確認であ

三)「ひばりの話」」

意識したと考えられる。

極楽浄土へ旅立だった

開先で羽鳥小学校代用教員を務めた元々は都内私立女子中高校の教 に載つてる『ひばりの話』を見せる。戦争末期頃だつたか梗概をき に見せて選ませる。 院」公式ホームページ掲載の 本尊曼荼羅に纏わる伝承話として知られている。 依拠した「中将姫による當麻曼荼羅制作伝説」 評を聞いて執筆にとりかかったことが判明した。「ひばりの話」 員であった義妹二人(嶋田豊子・秀子)に作品概要を語り聞かせ、 十巻〉岩波書店、一九九○年五月)とあり、戦争末期に静岡での疎 る童話の発表はこれがはじめてだ」(「羽鳥(二)」『中勘助全集』〈第 かせたら大層期待をかけてたものだ。二人ともいいといふ。純然た じめて出来た俳句を『芸林閒歩』に送らうと思ひ書きぬきを妹たち 年七月一日)を詳しく確認すると「七月一日 先行研究⑧の市川による指摘「純然たる童話の発表」(昭和二一 (中略)それから届いたばかりの『フレンド』 「中将姫の伝説」] は奈良県の當麻寺の 樟ケ谷にゐるときは の概要である 次は「當麻寺奥の が

両親による初瀬の観音詣でにより生を受けた中将姫は、実母亡き

て去る。約束の日、阿弥陀如来と二十五菩薩が来迎され、中将姫は老尼は阿弥陀如来の極楽世界を拝したいと希望する。そこに現れた老尼と阿弥陀如来の極楽世界を拝したいと希望する。そこに現れた老尼と阿弥陀如来の極楽世界を拝したいと希望する。そこに現れた老尼と阿弥陀如来の極楽世界を拝したいと希望する。そこに現れた老尼と阿弥陀如来に姿を変え、十三年後に姫を迎えに来ると約束した中将姫は一夜には阿弥陀如来を望み、尼僧となる後父に嫁いだ継母によって命を狙われ、宇陀のひばり山に捨てられ後父に嫁いだ継母によって命を狙われ、宇陀のひばり山に捨てられ

先行研究®で市川が言及するように「中将姫の伝説」は、謡曲「雲生行研究®で市川が言及するように「中将姫の伝説」は、謡曲「雲上のである。 但し、中勘助の友人である野上豊一郎著『謡曲全集』及び佐成謙太郎著『謡曲大観』においても出典の文献未詳曲全集』及び佐成謙太郎著『謡曲大観』においても出典の文献未詳まし、の原話である。

ではいい。 「議言」により「無実の罪」を着せられ、父の「なにがしの大臣」 と姫に糧食を与えた草刈りの翁が阿弥陀如来に姫を救ってもらおうと したひばりたちは無力ながらも阿弥陀如来に姫を救ってもらおうと したひばりたちは無力ながらも阿弥陀如来に姫を救ってもらおうと と姫に糧食を与えた草刈りの翁が阿弥陀如来に姫を救ってもらおうと でいばりたちは無力ながらも阿弥陀如来に姫を救ってもらおうと でいばりながらも阿弥陀如来に姫を救ってもらおうと でいばりは、これた結果、極楽曼荼羅を織りあげるという阿弥陀如来へ のを見るながらも阿弥陀如来に姫を救ってもらおうと

原話と比較すると、登場人物の数を極力減らし、物語の筋を極力

初出では前書き、用字ともに子ども向けに考慮されている。るひばりの純真な行いが奇跡を生むという筋が分かり易くなった。単純化することにより、中将姫の曼荼羅制作への熱意、それを助け

五 おわりに

(一) 作品に描かれたテーマを巡って

ども鳥の仲間では善い鳥は誰にも好かれるにきまつたもので、善 将姫はマンダラを織り、 ひばりは憂う。その生き辛さや命の危機的状況を受け入れつつ、中 いる人間世界の「非情さ」「悪智恵があるから面倒になる」状況を 慕はれなつかれるためひとの讒言をうけ」ることになった中将姫の ん」である。そのひばりの価値観と対照的な「あまり善い方で皆に がために忌み嫌はれるといふことはつひぞきいたことがございませ している。後者においてはひばりの言葉の中にそれは現れる。「私 をするのは人げんであり鬼神はそのようなことを行わない、と宣言 すようなことはせんから。」つまり、「まがったこと」「わるいこと_ るいことをせんとはかんしんなやつじゃな。あんしんせい、こまら てせん。まがったことをするやつは人げんだけじゃ。……だが、わ すむものはみなまっすぐなものばかりじゃ。まがったことはけっし る。「鬼神に横道なしじゃ。わかるかこぞう。わしらにような天に することが理解できた。前者においては雷の言葉の中にそれは現れ 「雷の太鼓とチャルメラ」「ひばりの話」に描かれたテーマは共诵 つまり両作品は、 という阿弥陀如来に対する誓願の行動に専念してい 鬼神やひばりの世界からみると、 ひばりは天高く飛び立ち、 姫を助けるよう 人間は「讒

不条理に満ちていることを示唆する。言」「無実の罪」を着せる等、「非情」「横道」を行い、人間世界は言」「無実の罪」を着せる等、「非情」「横道」を行い、人間世界は

の内容は「童話、 ものの人間の嫉妬の醜さと生き辛い人間の世界に対して、それを受 り、子ども向け、大人向け、と読者対象により用字、 とがき」角川書店版『中勘助全集』 語 に私の好み、私の持味だといふ点から私はこの巻 いて作者自らが解説した言説 の物語』がすきです」(前掲「まえがき」ポプラ社『中勘助集』)と ち、後者にぞくするものです。うまいまずいはさておいて、私は『鳥 で、おとなむきと子どもむきにわけることのできる童話風物語のう 戦後の子どもたちに中勘助は「雷の太鼓とチャルメラ」の子ども、 も信仰心や道理を失わない等の美質を持つ人間・鳥が幸福となる。 母子家庭の貧窮や無実の罪を着せられるといった不条理な状況下で に繋がっていく。 り、人間世界の「非情さ」「横道」を覆す奇跡が起きるという結末 ばりも共に「命をかけた」阿弥陀如来への「誓願」の行動が転とな 雀の話」では人間世界の「非情さ」「横道」を受け入れ中将姫もひ 承転結」の転となり、 払う代わりに太鼓とチャルメラを交換するという人間世界の道理と 「ひばりの話」の中将姫を理想的人間像として示したと考えられる。 「鬼神に横道なし」という自らの言葉に従う。この鬼神の行動が「起 また「自分の専売のように思っている一群の鳥の物語の中のもの 「雷の太鼓とチャルメラ」では鬼神は、食べた支那そばの代金を 一収録の第三巻)の出たことに特別の満足をおぼえる」(前掲「あ 特に成人のための童話」である「鳥の物語」 最終的に両作品ともに、素直さ、正直さ、親孝行、 致富譚・孝子譚としての結末に繋がる。「雲 「成功不成功はおいて、それが題材的 〈第三巻〉)と同義である。 (筆者注 表現を変える 「鳥の物

間の本質を見つめた考え方」に他ならないだろう。つまり、戦前 学の特質が見受けられる。そのテーマとは先行研究⑨で「銀の匙 小説と同じテーマに基本的には同じであるところに中勘助の児童文 ろに、子どもの言語発達に即した教育的な視点が認められる。 を子どもの視点で子どもにも分かりやすい言葉と表現で行ったとこ 戦後の中勘助の児童文学観には大きな変容はなく、 け止め凌駕していく人間の意志の力や美質が救済となる、 「成長小説」としての要因について西本が言及したところの「人 人間社会の批判 大人向け

(二) まとめ

失わない等の美質を持つ人間・鳥が神仏の加護を得、 年〉における中勘助の評)として代表作と数えていたことが判明 者にぞくするもの」(「まえがき」『中勘助集』〈ポプラ社、一九六○ となむきと子どもむきにわけることのできる童話風物語のうち、後 メラ」 は「雷の太鼓とチャルメラ お伽話」 と作品題名にカテゴリー を得るプロットでは、大きな変更はなかった。「雷の太鼓とチャル ひらがなから漢字への変更 作品内の詩の変更(「ひばりの話」)、 解のための問いや註の削除 「お伽話」を付加することで子ども向けとして、「ひばりの話」は「お 作者による改編結果である 親孝行、母子家庭の貧窮や無実の罪を着せられても信仰心を (両作品)が確認できたが、素直さ、 (「雷の太鼓とチャルメラ」)、前書きと 『中勘助全集』 用字に関し振り仮名の削除 収録作品では、 奇跡的な幸福 本文読 正

Ŕ

0)

り」:「しずかな流れ」以外にも随筆 「鳥の物語」 巻末表1の から)通り、 「鶴の話」「ひばりの話」、 戦前 の教科書収録作品 「島守」「妹の死」「猫の親子」、 詩集「飛鳥」「藁科」、 「銀の匙」・「沼のほと

> ろうか た中勘助の特殊な児童文学作家性と位置づけられるものではないだ るように大正期の童謡童話の市民権獲得やジャーナリズムと乖離し られた作品が存在する。それは先行論文②の與田準一の指摘にもあ 影響力を作者自ら、児童文学者、 中勘助自身が子どもを読者対象として設定して書いた作品以外に ている」と子どもの想像力に与える影響を語る。表1や拙稿の通り、 せの結果から「この物語が子どもたちを、遠く天空に運ぶ力をもっ す」と述べた上で、先行研究⑥で引用したように、実際の読み聞 ありました。残念に思って、それらの作品を集めたのが、この本で 書きとめてみました。すると、そのような作品のなかには、 たちのおもしろがったもの、そして、私もよいと考えた作品の名を 三年、私の家にたくさんの子どもが本を読みにきます。その子ども 石井桃子は「はじめに」『新日本児童文学選』において「この二、 定稿)」を「すいれん」という題名を付して児童文学選に採択した 拡げている。 筆にほぼ限定されていたのに比して童話風物語 しばみ」等、 戦後まもなく坪田譲治編集『童話教室』に寄稿された 般に、手にとれる本には、はいっていないようなものが、 「鶴の話」、「すいれん」等、大人向け文学作品が子どもへ与える 「ひばりの話」と同時並行で執筆された一般雑誌 中でも元々、 戦前の中勘助教科書掲載作品が 日記体随筆作品 国語科教科書編集者によって認め 『逍遥』収録の「童話(未 「銀の匙」と日記体随 童謡詩にも範囲 『新潮』 「山がつとは かなり 初出

を考えていく必要があろう。 中勘助が子ども読者を意識したか、 それら児童文学作品も含め、 戦中・戦後の中勘助の文学的業績 否かの判断 に囚われることな

註

- 収録短歌紹介を含む―」(『東京都市大学人間科学部紀要』第一二号、二〇 拙著「戦前・戦中の教科書教材としての中勘助作品の位置づけ―全集未
- (2) 稲森道三郎「四 羽鳥の文学」『羽鳥の中勘助』〈私家版〉一九五六年一
- (3) 「後記 中勘助の詩人性に対する評価が、この作品の評価に繋がっていると考える 與田の中勘助の児童文学作家性に対する評価や、先行論文①の山室による 昭和三十五年十月十五日、あかね書房刊)に『すいれん』の題、 のが自然であろう。 記のままで収録されていることが判明した。本文中、先行論文②の通り、 英雄、與田準一、石井桃子、山室静が編者を務めた『日本童話宝玉集』〈上〉 角川書店版 かではない」とある。「童話」の初出誌未詳、単行本『逍遥』収録、底本 片仮名表記に更めるなどして収録されている。 (昭和三十一年九月五日、宝文館)に「すいれん」の題、動物名は初出表 「『童話』は『世界児童文学全集』第30『新日本児童文学選』(石井桃子編 逍遥」『中勘助全集』〈第七巻〉(岩波書店、一九九〇・二)には 『中勘助全集』〈第七巻〉との記載有。今回の調査の結果、関 題や表記変更の事由は詳ら 動物名を
- が、それらしい文献は見当らない」とある。 く、謡曲以前にかうした伝説が伝はつてゐたのでなからうかと思はれる れるが典拠は見当たない」、佐成謙太郎『謡曲大観』 雀山」「出典」には「かういつた中将姫苦難の伝説があつたものかと思は 一九五六年四月)「雲雀山」「出典」には「謡曲作者の創作したものではな 野上豊一郎『謡曲全集』〈第三巻〉(中央公論社、一九三五年八月)「雲 〈第四卷〉 (明治書院)
- 註(1)に同じ

引用・参考文献

- ・野上豊一郎『謡曲全集』〈第三巻〉中央公論社、一九三五年八月
- 中勘助「ひばりの話」『フレンド』〈五月・六月合併号〉フレンド社、 一九四
- 山室静「かいせつ」『少年少女小説篇2』〈日本児童文学全集第一二巻〉 書房、一九五三年六月 河出

- ・中勘助「雷のたいことチャルメラ」『三年の学習』〈八月号〉学習研究社、 九五四年八月
- 中勘助「鶴の話」(『中学校国語一下』〈学校図書、一九五四年
- ・佐成謙太郎『謡曲大観』〈第四巻〉明治書院、一九五六年四月
- ・與田準一「解説」『日本童話宝玉集』〈上〉宝文観、一九五六年九月
- ・稲森道三郎「四 羽鳥の文学」『羽鳥の中勘助』〈私家版〉一九五六年一二月
- ・飛田文雄「『銀の匙』問題・鑑賞」・「『島守』問題・鑑賞」・「『沼のほとり』 学生文学全集一七〉新紀元社、 問題・鑑賞」・「『しずかな流れ』問題・鑑賞」 『中勘助・野上弥生子集』 〈中 一九五七年六月
- 小林喜三郎・進藤康助「読書指導〈「一、『銀の匙』を読んで」・「二、 話』」・「三、『妹の死』」〉『中勘助集』〈新日本少年少女文学全集26〉ポプラ社 一九六〇年三月
- 中勘助「まえがき」『中勘助集』〈新日本少年少女文学全集26〉ポプラ社、一 九六〇年三月
- 石井桃子「『新日本児童文学選』について」『新日本児童文学選』〈『世界児童
- 文学全集』第三〇〉あかね書房、一九六〇年一〇月
- ・中勘助「ひばりの話」『くもんの読書コースG』公文教育研究会、一九八八年 中勘助「羽鳥(二)」『中勘助全集』〈第十巻〉岩波書店、一九九〇年五月
- 和田忠彦・野崎歓「対談:子どもの奪還」『国文学』〈8月臨時増刊号〉学燈 社、二〇〇八年八月
- 市川浩昭「中勘助の嫉妬観」『国文学』〈七八八号 嫉妬考〉学燈社、二○○
- 西本鶏介「解説」中勘助『銀の匙』〈日本の名作ポプラポケット文庫中学生 向け〉ポプラ社、二〇一六年一月
- or.jp/about/chujyohimestory.html 閲覧日二〇二一年一一月七日 「當麻寺奥の院」公式ホームページ「中将姫の伝説」http://www.taimadera

謝辞 上げます。 図6及び図10の掲載を許可してくださった静岡市文化振興課に感謝申し

部である 本稿は科研費二〇一九年度基盤研究(C)19K00329の研究成果の一

表 1 児童文学全集掲載中勘助文学作品一覧

No	書 名	叢書名	掲載作品	出版者	出版年月	備考
参考	童話教室 (雑誌)	2巻10号	「山がつとはしばみ」 (詩)	桐書房	1948. 11	坪田譲治編
1	日本名作物語	毎日少年ライブラリー	「銀の匙」	毎日新聞社	1952. 6	古谷綱武編
2	少年少女小説篇 2	日本児童文学全集 12	「ひばりの話」	河出書房	1953. 6	小川未明、坪田譲治、 百田宗治、塚原健二郎、浜田広介、酒井朝 彦、古谷綱武編
3	文芸童話集	世界少年少女文学全集 30(日本編 3)	「つるの話」	創元社	1953. 9	坪田譲治解説
4	少年少女のための日本 文学宝玉集 上		「銀の匙(抄)」	宝文館	1956. 8	阿部知二等編
5	日本童話宝玉集 上		「すいれん」	宝文館	1956. 9	関英雄、与田準一、石 井桃子、山室静編
6	中勘助・野上弥生子集	中学生文学全集 17	「銀の匙(抄)」「『銀の 匙』問題・鑑賞」「鳥 守」「『鳥守』問題・鑑 賞」「沼のほとり(抄)」 「『沼のほとり』問題・ 鑑賞」「しずかな流れ (抄)」「『しずかな流れれ』問題・鑑賞」	新紀元社	1957. 6	「解説」「年譜」「中学 校教科書にのっている 中勘助の作品」吉田精 一、飛田多喜雄責任編 集
7	新選日本児童文学 3 (現代編)		「山がつとはしばみ」	小峰書店	1959. 5	小川未明、佐藤春夫、 坪田譲治監修、千葉省 三、与田凖一、滑川道 夫、藤田圭雄、奈街三 郎、瀬田貞二、鳥越信 編
8	中勘助集	新日本少年少女文学全 集 26	「銀の匙」「妹の死」「飛 鳥(詩)」「藁科(詩)」 「鶴の話」「ひばりの 話」「沼のほとり(抄)」 「しずかな流れ(抄)」	ポプラ社	1960. 3	「まえがき」「解説」「読書指導」〈「一、『銀の 匙』を読んで」「二、 『鶴の話』」「三、『妹の 死』」〉「年譜」「作品と 教科書の連結」「主な 作品集」田中豊太郎、 山本和夫、馬場正男編 集委員
9	新日本児童文学選	世界児童文学全集 30	「すいれん」	あかね書房	1960. 10	石井桃子編
10	現代日本名作集	少年少女新世界文学全 集;38(日本現代編)	「銀の匙(抄)」	講談社	1965. 11	石森延男編
11	夏目漱石·中勘助·高 浜虚子集	少年少女日本文学全集 2	「銀の匙」	講談社	1961	阿部知二等編
12	現代童話1	福武文庫	「猫の親子」	福武書店	1991. 2	今江祥智、山下明生編
13	ランプで書いた物語: 古典的作家三人集	信州こども文学館 1	「銀の匙」	郷土出版社	2002. 7	小宮山量平監修、和田 登責任編集





図 2





図 4



図 5

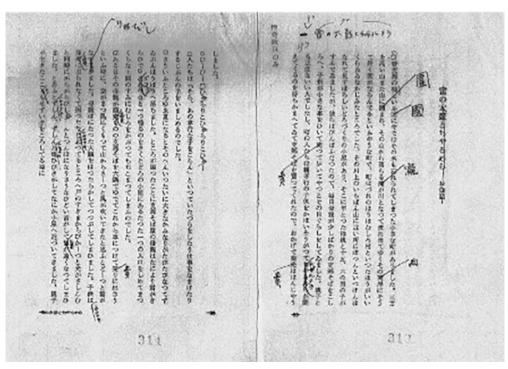


図 6



図 7









図 10

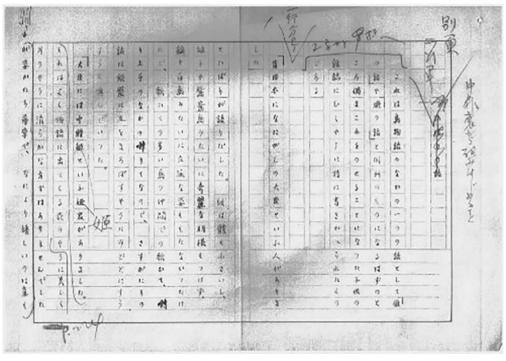


図 11